

「承認」と「保障」の共同体をめざして —草創期ダルクにおける「回復」と「支援」—

平 井 秀 幸

本論文では、「東京ダルク」として1985年にスタートしたDARC (Drug Addiction Rehabilitation Center: ダルク) の草創期に注目し、薬物依存からの「回復」とそのための「支援」のあり方がどのような意味づけのもとで理解されていたのかについて、ダルク創設者である近藤恒夫の言説をはじめとする関係者の諸言説をもとに分析を行う。ダルクは、薬物依存者が安全な環境で「回復」をめざすことのできる「承認」の空間として構想されたが、そこでの「回復」とは、医師等の専門家の監督の下で病気を治し、原状へと復帰する、という意味での回復ではなく、ときに再使用を繰り返す中で自ら「依存」であることを認める自由を行使し、他の「依存」者との平等な関係性に基づく共同生活を通して、「依存」という病気と付き合い続ける＝薬をやめ続けるような「回復」であった。そうした「回復」を手助けするためのダルクの「支援」は、“他者とは異なる自立した自己”と“個を超えたつながりの共通基盤”の双方をメンバーに与えていくような、「承認」供給の場としての「ミーティング」を中心に組織されていたが、他方で、そうした「承認」を下支えする多様な「保障」の不足とその必要性も強く認識されていた。しかし、社会においては容認されがたい薬物依存者の「承認」と「保障」を提供しようとするダルクの「支援」観は同時に、メンバーがダルクを“卒業”した後の「回復」——NA (Narcotics Anonymous) に参加しながらの社会での「回復」——の困難性認識と表裏のものでもあったといえる。NAは自助グループである以上「保障」機能を持ちえず、グループに参加する時間以外の社会生活においては「承認」からも疎外される可能性が極めて高い。草創期ダルクにおいて模索された“「依存」からの「回復」を可能とするための「承認」と「保障」という二つの「支援」は、両者を調達することの（特にダルク“卒業”後の）困難性と必要性といういまだ解かれえぬ課題を、現在のわれわれに対して投げかけるものでもある。

キーワード：DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center: ダルク)、回復、支援

1. ダルクとは何か

本論文は、日本ではほぼ唯一の民間薬物依存リハビリ施設であるDARC (Drug Addiction Rehabilitation Center: ダルク) の“草創期”——1985年に日本ではじめて東京日暮里に設立された東京ダルクの設立時期——に注目して、創設関係者たち自身によってダルクがどのような場として意味づけられていたのかについての経験的分析をもとに、薬物依存からの「回復」とその「支援」におけるダルクの「独創性 (originality)」について、社会学的観点から考察を行うことを目的としている。

具体的議論に入る前に、本論文の対象であるダルクについて、簡単な紹介を試みておきたい。

設立以来四半世紀以上の歴史をもち、2012年現在では全国に60か所以上を数えるまでに拡大しているダルクに関しては、利用者（メンバー）、職員（スタッフ）、関係者、外部研究者等によって、少なからぬ量の考察がすでになされてきている（APARI 2000、近藤 2000a、嶋根 2006・2007）。そこで、ここでは本論文にとって特に重要な点に絞って、ダルクの概要を確認しておきたい。

ダルクは、薬物依存の当事者たちが、セルフヘルプ・グループであるAA（Alcoholics Anonymous）の「12ステップ」¹⁾に基づいた一日三回（朝・昼・夜）のミーティング参加を核とするプログラムを実践しながら、最低でも数ヶ月にわたる長期の共同生活の中で「回復」を目指すリハビリテーション施設である。「回復」に向けたプログラムには各地のダルクごとに多様性が存在するものの、NA（Narcotics Anonymous：AAと同様の「12ステップ」に基づく薬物依存者のためのセルフヘルプ・グループ）に参加しつつ薬物を使わない生活を継続できるような生き方が模索されている点では緩やかに共通している。例えば、本論文での対象となる東京ダルクのプログラムは、いわゆる「言いつばなし、聞きつばなし」のミーティングに一日三回参加することが主体であるが、そのほかに個別カウンセリング、スポーツ・レクリエーション、医療機関や就職支援機関とのネットワーク的支援等も存在しており、その意味で「回復」に向けたきわめて多様な「支援」を行う施設であるといえる。

ダルクには通所と入寮の二つのシステムがあるが、多くのダルクは入寮施設を持ち、宿泊生活を共にするメンバーと、薬物からの「回復」経験を有するスタッフとによる共同生活施設となっている。メンバーだけでなく、スタッフに関してもほぼすべてが（元）薬物依存「当事者」であること、日本において通常は「犯罪」行為として厳しい取締りの対象となる薬物使用を「依存（症）」という「病気」として捉えつつ、セルフヘルプ的なプログラムと「仲間」²⁾との相互作用による「回復」が志向されていること、ダルク利用中の薬物再使用（「スリップ」）に対して、それを罰するのではなく「回復」途上における重要な「ステップ」として捉えていること、など、きわめて興味深い「回復」／「支援」観と実践を有している³⁾ことから、2000年代以降、施設数の急激な増加や「当事者」活動型の「支援」形態に対する注目の上昇とあいまって社会的な関心が増しつつある。

筆者も加わり、東京ダルクを中心として2009年に実施された全国ダルク調査（各施設、スタッフ、メンバーを対象とした全数調査）⁴⁾の結果から、その時点でのダルクの全体像を描き出してみよう。調査時点において、施設数は全国で68施設（そのうち80%以上の施設が2000年以降に開設。約9割の施設が定員数20名以下の小・中規模施設）、スタッフ数は86名（男：74、女：12）、メンバー数は445名（男：397、女：44）であった。

施設やスタッフをめぐる状況は、必ずしも恵まれたものとはいえない。半数以上の施設が、年間収入1000万円以下（平成18年度）であり、「職員に十分な給料を払えなかったことがある（あてはまる＋まああてはまる）」施設が82%と、経営状況は総じて苦しいといえる。自立支援法下での法人化に向けた動きが加速しているが（「法人化済み」と「これから計画」あわせて64%）、自立支援法下の施設に移行したことで補助金が増えたとする施設は約半数に過ぎず、逆に「事務手続きが煩雑化した（あてはまる）」施設が70%にのぼることからも、個々のスタッフにかかる負担が増大していることがうかがえる⁵⁾。メンバーへの影響も、「利用者のニーズ

に沿ったサービスが提供できるようになった（あまりあてはまらない+あてはまらない）」施設が82%、「利用者の経済的負担が軽減された（あまりあてはまらない+あてはまらない）」施設が91%となるなど、自立支援法のメリットはさほど感受されていないのが現実である。いまだに公的補助をどこからも受けていない施設が44%にのぼる。

平均的なメンバーのプロフィールは「覚せい剤を主たる使用薬物とする壮年期の男性入寮者」と要約できそうである。メンバーの年齢構成は20～29歳が24%、30～39歳が38%、40～49歳が25%であり、以上で全体の約9割を占める。ダルクにつながるきっかけとなった薬物は覚せい剤（49%）、有機溶剤（13%）が多く、利用形態は入寮者（83%）、通所者（11%）と入寮者が多い⁶⁾。メンバーの多くは、過去において多くの社会的ハンディキャップを有し、ダルク以外の薬物統制機関における被介入経験を持っている。中学生までに虐待をうけた経験のある人が半数以上であり（身体的虐待:54%、精神的虐待:57%）、学歴は中卒（16%）、高卒（31%）と相対的に低く、過去において暴力団と何らかのかかわりをもっていた者が64%となっている。医療とのかかわりでは、現在精神科・神経科を受診している者が68%、これまでに受診経験がある者が89%、入院経験のある者が80%にのぼり、司法とのかかわりでは、薬物理由の逮捕歴のある者が72%である。こうした困難性は、ダルクにいる現在においても、消え去ったわけでは毛頭ない。過去一年間で「自殺しようと思った」ことがある者が41%、生活保護が現在における主たる経済的基盤であるという者は63%⁷⁾に達しており、物心ともに基礎的保障を必要とする状態にある。このことは、ダルク退所後に受けたサービスとして、「生活費の保障（39%）」、「低家賃住宅の提供（36%）」、「一般の仕事の紹介（36%）」、「不安な時にいつでも相談できるサービス（35%）」といったニーズが、「コミュニケーション能力や対人関係スキルのトレーニング（23%）」、「心理カウンセリング（22%）」、「職業訓練（28%）」などをおさえて最上位に挙げられていることからもうかがい知ることができよう（平井2008）。

2. 問題関心

すでに述べたように、1985年に日本ではじめて東京ダルクが設立されて以来、すでに四半世紀以上が経過している。1995年の時点で全国にわずか9施設を数えるのみであったダルクは、特に2000年以降目覚ましいスピードで増加を続け、現在に至っている。また、特に近年においては、ダルク創設以来の“相互独立性”の伝統⁸⁾にも助けられ、全国各地のダルクにおいて独自の取り組み（独自の「回復」、「支援」のあり方の模索）が活発化している。このように量的に拡大し、質的にも多様化しつつあるダルクの現在において、本論文のようにあらためて草創期の東京ダルク⁹⁾における「回復」、「支援」観を問い直す試みには、どのような意義があるのだろうか。

このことを考えるうえで重要なのは、近年においてダルク内部（ダルクスタッフ）と外部（政策・研究）の双方において、ダルクの「アイデンティティ」をめぐる議論がイシュー化していることであろう。

先述したように、ここ数年、全国各地のダルクにおいてこれまでの活動とは異なる新たな実践の試みが活発化している。奈良ダルク（2012年にダルクを脱退し、Healing Gardenに改称）

においては、アミティ等の治療共同体プログラム¹⁰⁾ やリカバリー・ダイナミクスの実践によって、心理療法等も積極的に活用する治療／教育志向へのシフトが見られる（矢澤 2010）。三重ダルクにおいては、従来の「言いつばなし、聞きつばなし」の12ステップミーティングに「乗ってこない」層、特に発達障がい等と薬物依存の重複障がいを抱える層への対応を模索している（市川 2010・2011）。栃木ダルクでは、職業訓練や農作業等の社会復帰プログラムの導入や、段階的に回復ステージを階層化した5ステージモデルの導入が行われており、京都ダルクでは、京都府薬務課や国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所・薬物依存研究部との協働事業（若年者向け認知行動療法プログラム）が開始されている。あくまでもこれらは一例に過ぎないが、こうした現状からは、個々のダルクがそれぞれ別個の実践的課題（教育、重複障がい、若年・就業支援等）に対応していく中で、結果として取り組みが多様化しつつある様子がうかがえよう。「ダルクの役割」（ダルクは何をすべきか、何ができるのか）をめぐるアイデンティティの模索が急務となっているのである。

それに対して、外部からダルクを観察する側（政策サイドや研究者）においても、ダルクのアイデンティティをめぐる問題は別の意味で重要な関心事項となりつつある。政策サイドの動向としては、矯正における「特別改善指導（薬物依存離脱指導）」にみられるダルクの処遇参加や、更生保護における現行の「覚せい剤事犯者処遇プログラム」や、刑の一部執行猶予制度において想定されるダルクとの連携など、ダルクを再犯予防のための政策の中に位置づけようとする方向性が見られる。刑事政策、社会福祉、精神医療に関する諸学問領域においても、上記の制度改革と連動しながら、ダルクを含めた薬物処遇政策全体の規範的スケッチに余念がない。「処罰から治療へ」を標語としてダルクをその重要要素と位置づける「日本版ドラッグコート」（石塚 2007）、ダルクとは異なる治療的オプションとしての「治療共同体」（宮永 2008・2010）、薬物依存からの「回復」者のプログラム参加を想定した薬物乱用者処遇センターの設立（小柳・染田 2005）、取締側と援助側がそれぞれの機能を果たしつつ、他方の機能発揮を期待することで補完的協力を果たす「∞字連携」（平井 2011）など、現状の（刑事）政策変動を意識しつつ、ダルクを処遇構造全体の中にかなるものとして位置づけていくのか、という問題関心に基づいた研究が蓄積されている。やはりここにも、ダルク内部とは別の意味で「ダルクの役割」やそのアイデンティティをめぐる考察の必要性認識が上昇しているのである。

そうした実践的／政策的／学問的情況の中で、草創期ダルクへの注目は一定の戦略的重要性を有すると思われる。第一に、ダルク創設前後の時期こそが、いうまでもなく「ダルクの役割」について最も考えられ、語られなければならない時期であった、ということがある。ダルク創設関係者たちは、未だなきダルクを創りあげるにあたって、「ダルクとは何か」「ダルクは何を目指すのか」——なぜわれわれはダルクを創るのか——といったアイデンティティをめぐる根本問題に関して、自分たち自身だけでなく、外部の地域・社会に向かって主張しなければならなかったはずだ。第二に、特にダルク創設者の近藤恒夫という固有名が重要である。近藤こそが、上記の役割をもっとも直接的に引き受け、だからこそ草創期ダルクのアイデンティティをめぐる言説を誰よりも多く書き記した張本人であった。現時点において、本論文のような関心を持って草創期ダルクに注目することは、近藤をはじめとする創設関係者たちが残した豊富

資料へのアクセスという意味での方法的メリットを持つ。第三に、先述したダルク内部・外部の議論が（肯定的にであれ、批判的にであれ）「ダルク」というときに理念的に想定しているのが、ほかならぬ近藤らによって設立された草創期ダルクである、という点が指摘できる。しばしば「ダルクの原点」（嶋根 2007：180）といった言葉で回顧される草創期ダルクの姿を経験的にあとづけておくことは、ダルクのアイデンティティをめぐる現在の錯綜した議論空間にクリアな見通しを与える一助になるはずだ。

しかし、草創期のダルクがいかなる場であったのかを探るにあたっては、同時にいくつかの事柄について注釈を付す必要があると思われる。第一に、草創期ダルクとは、いうまでもなく歴史的／空間的にユニークな存在であり、その「回復」「支援」観はダルク一般を決して代表しない、ということである。その意味で、本論文は「The ダルク」といったものを描き出そうとしたり、それをダルク唯一のアイデンティティとして一般化しようとする欲望を有さない。第二に、さしあたってわれわれは、草創期ダルクにおける「回復」に向けた「支援」実践を“あるべき”ダルクの姿としてトータルに理念化・規範化したり、逆に“時代遅れ”のダルクとして批判・価値下げしようとする意図を持たない。しかしながら同時に、以下での分析では、不可避免的に筆者の注目する観点・要素に偏って草創期ダルクが切り取られ、記述されることが避けられず、その意味において非中立的なものであろう。われわれは、草創期ダルクの「回復」「支援」観と実践の中に、掬い取られ、言説化されるべきものがある、との価値を明確に有しているのであり、その意味で本論文は筆者自身の規範的立ち位置を示すものともなるはずである。

3. 課題設定と方法

前節で述べた問題関心に基づいて、本論文では以下のような作業課題を設定する。

MQ：「東京ダルク」として1985年にスタートした日本初のダルクは、草創期においていかなる場として存在したのか

そして、上の上位課題（MQ）を解明するにあたって、さらに以下のふたつの下位課題（SQ）を設定する。

SQ1：東京ダルクは、設立当事者たちのいかなる問題関心に基づいて設立されたのか

SQ2：草創期の東京ダルクにおいて、そこでの「回復」と「支援」のあり方はいかなるものとして意味づけられていたのか

これらの課題を解明するために、本論文では、主として東京ダルク開設時から数年間にわたって東京ダルク代表としてリーダーシップをとったダルク創設者の近藤恒夫の著作をもとに、東京ダルク設立と運営に影響を与えた関係者たちの言説や当時の記録が残るダルク刊行物、ニューズレター等を補足的に活用しながら、当時かれらが「（東京）ダルク」というものに対して——特にそこでの「回復」と「支援」のあり方に対して——どのような問題関心に基づき、

いかなる意味づけを与えていたのかを分析する。

4. 分析

4. 1. なぜダルクが創設されたのか——「承認」の空間を求めて——

平井（2007）においては、ダルクの創設を日本の薬物使用への「介入／処遇」史全体の中に位置づけたとき、司法および精神医療セクターにおける「依存」処遇の困難性認識をきっかけとして、ダルクが処遇構造の中に「依存」処遇の新たな担い手として“招き入れられた”側面があるのではないかと、との仮説的理解が示されている。こうした理解はしかし、司法や医療による長い専門家支配を脱却して当事者の立場を確立した、とする（ある意味で甘美な）進歩史観を相対化する効果がある反面、ダルク創設に与った当事者たち自身の意味付与プロセスをブラックボックス化してしまう問題性をはらんでいる。本項では、当事者たちがどのような関心からダルクを設立しようとしていたのかを、主としてダルク創設者の近藤恒夫の言説を手がかりに分析する。ここでは、特に薬物依存者の「承認」に向けた問題関心に注目しながら、ダルクの設立過程をあとづけることにしたい。

1980年9月に覚せい剤の所持・使用で逮捕され、執行猶予判決を受けた近藤は、生活保護を受けながら札幌のAAミーティングに出続ける日々を送っていた。そんな折、彼に大きな影響を与えたメリノール宣教会のロイ・アッセンハイマー神父から誘われ、札幌マック¹¹⁾の開設に所長してかわかることになる。見事札幌マックを軌道に乗せた近藤は、いったん東京の三ノ輪マックスタッフとして働いたあと、1983年8月に帯広マックの開設指示を受けて再び北海道に渡り、同年11月に三ノ輪マックの資金集めを担うロイ神父の補佐として、再び東京に戻るようになった。劣悪な労働・生活環境の中で、献金の礼状書きや献金依頼の企業まわりに忙殺される日々を、近藤は「ムシャクシャして、今にも爆発しそうだった」（近藤 2000a：118）と述べている。

そんな時期のある日のことだった。三ノ輪マックからロイさんのいるメリノール・レジデンスまで、マックの創始者のジャン・ミーニー神父と一緒に歩いていた。アル中ばかりを大切にしているマックの活動に腹が立っていたから、私は、こう言った。「ミーニーさん、マックをもう一ヶ所増やすとすれば、薬物依存者のために作りたいな。薬物依存者のハウスも必要ですよ」すると、ミーニーさんは、間髪入れずに、こう言い切った。「薬物依存者の回復なんて、ありゃしないよ。」私は、ムカツときた。「じゃあ、ここにいるオレは何なんだ。薬物依存者じゃないか。オレの回復はないってことか…」私は、しばらく押し黙ったままだった

（近藤 1997：86）

ミーニー神父は、その一年ほど前、刑務所を出所した薬物依存者のための共同生活施設を作ったものの、多くの入所者が再使用してしまう、という苦い失敗経験を有していた。しかし、当時それを知らなかった近藤にとっては、ミーニー神父との会話は、「回復は信じない」と言わ

れたら、薬物依存者本人の私自身の回復が否定されてしまう」（近藤 2000a：119）という認識をもたらす経験であり、「アル中にはデイケアセンターも宿泊施設もあるのだから、回復できるのは当たり前ではないか。アル中は回復できるが薬中は回復できないと言うのは、薬中に対する差別、偏見だ。薬中だって、いろんな施設があればきっと回復できる」（近藤 1997：87）という信念を導くことになった。

近藤とともに草創期ダルクの運営に奔走した外山憲治（後の名古屋ダルク代表）は、近藤と同様に、薬物依存者が回復の主体として承認される場としてダルクが設立されたことを述懐している。

その頃、近藤さんも頻繁に連絡をくれるようになって、「ダルクを作る」と言っていました。「薬物依存者にも回復の場所さえあればなんとかなる」という思いが、彼の中にきつとあったんでしょうね。僕もそう思っていました。……だから、心からNAが欲しいと思ったし「薬物依存者の、俺たちだけの場所が欲しい」と切望していました。

（外山 1999：15）

近藤さんがだいたいクリーン6年くらい、僕は2年くらいだったでしょうか。いよいよダルクがオープンすることになりました。……彼は何も言いませんでしたが、僕の中では「やっとヤク中だけの集まれる場所ができた」という思いでした。

（外山 1999：16）

それまで、薬物依存者は、差別や偏見のまなざしで見られることこそあれど、（アルコール依存者のように）「回復」が可能であると考えられてはいなかった。近藤や外山は、そうした薬物依存者に対して、自己の存在を肯定される中で「回復」に取り組む場とチャンスを与えることで、薬物依存者にとっての安全な居場所、すなわち「承認」の空間としてダルクを位置づけたい、という問題関心を有していたのである。

4. 2. 草創期ダルクの「支援」と「回復」

こうした「承認」に向けた問題関心は、草創期ダルクにおいていかなる実践を導いていったのだろうか。これまでの先行研究においても、ダルクにおける特有の「支援」や「回復」のあり方はさまざまに論じられてきたが、ここでは、上で論じた「承認」というカテゴリに特に注目して、草創期ダルクの実践に付与された意味づけを要約的に分析してみたい。

4. 2. 1. 「依存」からの「回復」

ダルクは何ををするところか、という問いに対しては、さしあたってその名称からも、「薬物依存（drug addiction）」からの「回復（rehabilitation）」を「支援」するところだ、と答えることができるだろう。しかし、そのときの「依存」、そしてそこからの「回復」とはなんだろうか。

ダルクでは、端的に「薬物依存は病気である」（近藤 2009a：5）とされるように、現在に至

るまで病気を介入上の概念として重視している。しかし、だからといってダルクを「医療化」の受け皿／担い手とのみ捉えるのはやや的是ずれである。ダルクが病気概念を採用するのは、確かに、薬物使用を「道徳」や「意志」の問題と捉え、「犯罪」として処罰的に処遇する方向から距離をとるためであり¹²⁾、また、「病気」であるがゆえに罹患責任を免除される解放性とも無関係ではない¹³⁾。しかし、ダルクにおける「依存」は、近代医療の病気概念とはその意味内容が大きく異なっている（平井 2004）。第一に、この病気は原状回復（restitution）的な意味での「治癒」を最終目的とした「回復の物語（the restitution narrative）」（Frank 1995=2002）を必ずしも受け入れるものではない。「今日一日」という標語にも代表されるように、薬物依存には完全な「治癒」はなく、依存であり続けながらも一日一日をやめ続けていく（ダルクではこれを「回復（rehabilitation）」と呼ぶ）ことしかできない／ことができる、と考えられている。第二に、この病気は他者から「診断」されるものではなく、自ら「認める」ものであるとされている。近藤（2000b）も述べるとおり、「私たちは、自分以外の他人が薬物依存者であるかどうかを判断したり、それを告げたりすることはありません。薬物依存は他人から知らされるのではなく、自分自身で判断すべきことなので、私たちは自分から薬物依存者であることを告白します」（近藤 2000b：17）ということなのである。

Conrad&Schneider（1980）は、「医療化」の「レベル」を、「概念（conception）」「制度（institution）」「相互作用（interaction）」の三つに区分しているが、ダルクと近代医療という二つの異なる「制度」は、他の二つの「レベル」においても鋭い対照を見せる。ダルクにおける「依存」＝病気「概念」は、他者から付与されるのではなく、自ら名乗る（名乗ってもよい、ではなく、名乗らなければならない）ものであるという点で、（診断カテゴリではなく）自己決定カテゴリであるといえる。また、ダルクにおける「依存」からの具体的な「回復」＝「相互作用」過程は、“病気であり続ける／病気と向き合い続ける”ような過程であり、“病気から治る／を治す”過程とは異なるのだ。

後者（「相互作用」の「レベル」）をより詳細に検討してみよう。まず、草創期ダルクでの「回復」過程においては、すべてのメンバーが「依存」という病気であるという点で、メンバー同士の平等性が強調されていた。

今の時代、世の中には、さまざまな「パワーゲーム」とも言えるような、「支配」と「コントロール」の人間関係に満ちている。ダルクは、このような人間関係とは一線を画する場所であることを大事にしている。「私も病気、あなたも病気」ここでは、上下関係もなく、もちろん、支配、コントロールの関係もない。

（近藤 2009a：6）

ダルクで私がやっていることは何かというと、僕はカウンセラーじゃないです。トレーニングも受けてないしね。僕はカウンセラーっていう言葉にすごく抵抗があるんですね。斉藤（学）先生も書かれているけど、リカバードは決してニセ医者やニセカウンセラーになっちゃダメですね。僕はダルクに来る人たちに何かを教えなければならないとか、そん

なことを考えたことは一回もないよね。もし自分が教える立場になったら、支配と依存の関係がダルクの中にできてしまう。先生と生徒、クライアントとお医者さんの関係みたいだね。そういう関係の中ではセルフヘルプということはありえないと思っています。

(近藤 1989→1992 : 75)

そして、重要なのはこうした平等性／非階層性の中で、「薬物をやめること」が即時的にダルクでの「回復」とは等置されないような「回復」観が醸成されていったことである。(ダルクを批判する立場からも肯定する立場からも) ダルクとは「断薬」とそのための「支援」を主目的とした施設である、と捉えられることが多い。しかし、実のところ草創期ダルクにおいて、施設目標の中に「薬物をやめること」は一切含まれていなかったのである。

ダルクはクスリをやめさせるための施設ではない。もともと「やめさせる」という発想事態が間違っているのである。人にはそれぞれ自分の人生を自由に選択しうる存在価値をもっている。ダルクでは、「クスリをやるのも、やめるのも」本人の責任であることをまづ伝えるようにしている

(近藤 2009a : 6)

人間、そして薬物依存者は、「依存」である点において(ベテランメンバーも新参者も、男性も女性も、スタッフもメンバーも)“平等”な存在であり、薬物をやめる／やめないといった人生上の選択を“自由”に行うことができる。やめると決意したからといって、または人より長くやめ続けているからといって、“偉い”わけではない。ただし、断っておかねばならないのは、こう言うからといって、草創期ダルクにおいて、薬物使用が許容／推奨されていたことを意味するわけではない、という点だろう。ロイ神父は、「回復的再使用 (therapeutic slip)」という言葉を用いながら、薬物再使用が「回復」途上における重要な一ステップであることを論じている。

スタッフは、他の依存者の薬物使用に対して無力なのだということを彼らの体験の中から学んでいます。彼らは「禁薬 (あなたは、けっして薬を使っちゃいけない!)」では薬をやめ続けることができないことも知っています。たとえ薬を使っても、ミーティングに参加することはできますが、いうまでもなく、彼がその使い方をコントロールできなくなった時には、ミーティングに行こうとしなくなるばかりか、ダルクからも姿を消してしまうでしょう。ただし、こうしたことが起きても、ダルクのスタッフは本人を探しに行ったりはしません。多くの場合、結局またDARCに戻ってくることになるのです。例えば、警察官に連れてこられたり、あるいは埃にまみれ、切り傷をつくり、衣服は裂け、悔恨の情や禁断症状を伴いながら、彼らは街角から戻ってくることでしょう。あるいは、刑務所で数ヶ月を送った後、戻ってくる人もいます。それでもダルクのカウンセラーたちは、叱ることもしなければ、罰することもしません。再使用した人々は、「悪い子」ではなく、「病

気の子」なのです。再使用したビギナーの苦しみを見ることは痛々しいことですが、カウンセラーたちはこのような個人のスリップをむしろ幸いなこととしてみています（実際には、こうしたことも仲間でない人たちから見ると、実に奇妙に映ることでしょう）。なぜなら、再使用がおそらくその人の回復にとって価値あるもの（asset）になるだろうということを知っているからです。ダルクにいるビギナーの中で、一度も再使用をしたことのない人というのはあまりいません。こうしたケースに対してわれわれは「回復的再使用」といった表現を用いています。再使用は、ビギナーに実存感と目が覚めるような経験を与えてくれます。本当に彼は「依存に対して無力であり生きていくことがどうにもなくなかった」のです。多くの場合、このことが彼らにとってターニング・ポイントとなっています。

（Assenheimer 1991 = 1991→1997：21-22、訳は一部変更した）

「薬物リハビリ施設における四つのエッセンシャル」と題されたこの論文は、草創期ダルクにおける「回復」観に大きな影響を与えたと思われる。ダルクの歴史を振り返って近藤が「これまでダルクに入寮した者の中には、違法薬物を仲間に売りつけたり、買ったりする者もいた。しかし私たちは、それを知っても警察に通報したことは一度もない。それだけは自慢できる」（近藤 2009b：203）と回顧するとき、その信念を支えたのは、「スリップは病気の再発で、薬物からの回復のためには必要な一過程だと思っている」、「ダルクでは入寮者がスリップをしても排除したり、見捨てたりはけっしてしない。スリップは回復への一過程に過ぎない」（近藤 1997：155）とする「回復的再使用」の概念に他ならなかった。

まとめれば、草創期ダルクにおける「依存」からの「回復」、それは医師等の専門家の監督の下で病気を治し、原状へと復帰する、という意味での回復ではなく、ときに再使用を繰り返す中で自ら「依存」であることを認める自由を行使し、自らとの関係において平等な他の「依存」者との共同生活を通して、「依存」という病気と付き合い続ける＝薬をやめ続けるような「回復」であったといえよう。ダルクの門をたたく者は（自らを「依存」であると認めていない者や再使用に至ってしまった者すらも）、こうした「回復」過程に“平等”に包摂され、「承認」されるのである。

4. 2. 2. 「承認」に向けた「支援」観——ミーティング——

それでは、こうした「回復」を手助けするためのダルクの「支援」とは、具体的にどのようなものとして意味づけられていたのだろうか。ここでとりあげるのは、ダルクにおける「支援」のメインフィールドともいえる、「ミーティング」である。上で引用した「薬物リハビリ施設における四つのエッセンシャル」論文の中で、ロイ神父は以下のように述べている。

現に、ダルクにはたった一つのルールしかありません。それは、「毎日三回のグループ・ミーティングに出ること」です。仲間でない人にとって理解しがたいのは、薬物を使用しないためのルールがないということでしょう

（Assenheimer 1991 = 1991→1997：21、訳は一部変更した）

ダルクにおけるミーティングは、しばしばNA (AA) の12ステップに依拠した「言いつぱなし、聞きっぱなし」のミーティングと呼ばれる（近藤 2000a）。午後のミーティングを例にとれば、椅子を円座に並べて、数名から十数名のメンバーとスタッフ（スタッフは司会を務めることが多い）によって、一時間から一時間半程度に渡って行われる。冒頭にその回の「テーマ」（仲間、弱さ、妬み、など）が提示され、それを受けてメンバーは自由に語りを披露する。多くの場合は、薬物にまつわる自らを一人称にした自己体験談が語られる。決して強制ではなく、語るのがためらわれたらパスしてもいい。他人が話しているときは残りのメンバーは口を挟まず、ひたすらその人の話に耳を傾ける。そして、話が終わったら質問や疑問、批判などを提起することなく、（もしあれば）次の語り手が語り始める。ミーティングで語られた内容も、原則として「その場限り」であり、ミーティング外部で本人の同意なく再言及されることはない——。その意味で、ミーティングは「言いつぱなし、聞きっぱなし」なのである。

こうしたミーティングが草創期ダルクにおける「支援」の重要要素となりえたのはいかにしてだろうか。それは、近藤自身が述べる、「ただ、毎日ミーティングを重ねることで、少しずつ自分自身を見つめ直し、内省できるようになる。そしてある日、自分自身のことが好きになり、自分を認める気持ちがめざめてくる」(近藤 2009a:4-5)といった効果と関連している。ミーティングは、上で論じたような「回復」を実現させ、メンバーに対するほかでもない「承認」供給の場として意味づけられていたのである。

綾屋・熊谷（2010）は、女性のためのダルクであるダルク女性ハウスを対象に、こうしたミーティングの「承認」効果について踏み込んで論じている。綾屋は、ミーティングが「空気を読みあう空間」にならず、他者の反応を気にすることなく自分の語りに集中することができる理想的な「言いつぱなし、聞きっぱなし」空間になった場合、「抑圧されずに一次データを語る場」としてミーティングが機能すると述べる（綾屋・熊谷 2010：136-148）。支配的な振る舞いのルールに抑圧されたり、その存在を気にして「空気を読む」ことなく、多様性が承認される空間としてミーティングが成立するのである。興味深いのは、綾屋がこの点に加えて、ミーティングには、コミュニティが共有する「言語、社会制度、信念や価値観の総体」である「構成的体制」の中にメンバーを位置づける機能がある、と論じている点であろう。ミーティングにおいては、メンバーによる個々の経験（一次データ）を持ち寄られ、それが他メンバーにも利用可能な言説資源として蓄積される。当初自分の言葉がうまく紡げないメンバーも、この共通の語りのデータベースから「よりよく私の経験を言い当てることができる言葉」を「部分引用」することで、自らの語りを構成・維持・改変することが容易になる。これを繰り返すうちに、多くのメンバーに引用された言葉が「仲間全体の言葉」として残っていくという（綾屋・熊谷 2010：148-151）。

コミュニティ内におけるこうしたやりとりにおいては、個々人が特定の誰かと深くつながっているというわけではない。あくまで、共通の語りのデータベースを媒介にして、部分的に、ゆるくつながっているだけだ。こうして、自分の語りを持つ主体でありながら、どこか語りのデータベースを媒介にして仲間とつながっているというかたちで、自由な「わ

たし」と、個を超えたつながりの両方を実現する場となることが理想的なのだと言えるだろう。

(綾屋・熊谷 2010 : 151)

実は、こうしたミーティングの機能は、草創期ダルクにおいてもかなり自覚的に意識されていたと思われる。近藤自身が、ミーティングにおけるメンバーの変化を、「人の話を黙って聞くというのは依存症者にとって、最初は非常にストレスがかかることなのだが、ここを乗り越えて、自分とは異なる意見や考え方、人生を持つ他人（＝仲間たち）の存在を認められるようになったとき、その人は回復に向けて大きく踏み出したことになる」（近藤 2000a : 33）、「薬物のことで説教ばかりされてきて「聞く耳」を持たなかった薬物依存者も同じ体験を持つ仲間の言葉は「オレも同じだ。そう思う」といった共感を覚える」（近藤 1997 : 154）、と述べるとき、彼はほぼ綾屋と同種のことを想定しているといえるだろう。ミーティングは、「自分とは違う」という異質性と「自分も同じだ」という同質性を双方ともに感受しながら、語りのデータベースの中に（完全に重なることなく）自分を位置づけていく実践を可能にする空間として理解されていたのだ。

4. 2. 3. 「承認」を下支えする「保障」

とはいえ、綾屋らも留意しているように、ミーティングを通して強調していた「依存」者の「承認」を通した「支援」をダルクの「支援」総体と等置することは、端的にミスリーディングであるばかりか、ダルクの実践を矮小化する危険性をはらんでいる。そのことを理解するために、ここでは「承認」と並ぶ草創期ダルクのもう一つの問題関心——「保障」——の存在を指摘してみたい。

ダルクの設立期を象徴するエピソードとして今でも言及されることが多いのが、近藤が東京ダルクの物件を探し出した直後、ロイ神父の心臓発作に居合わせる場面である。

当時の私の給料は十三万円だった。それなのに、なぜ給料分の家賃の一軒家に決めたのか、自分でもわからない。とにかく、敷金と礼金合わせて家賃の六ヶ月分、七十八万円が必要だった。手持ちのお金を差し引きすると、あと七十二万円足りなかった。そこで鷺谷の事務所に戻って、ロイさんに頼み込んだ。「ロイさん、いい物件が見つかった。そっちに引っ越しますから七十二万円を貸してください」ロイさんは首を前後に小さく動かしてうなづいた。じつは、発作の苦しみに耐えるだけで精一杯だったのだが…。しかし、私はOKのサインだと思った。すぐにロイさんの銀行通帳を持って銀行に走り、キャッシュカードで七十二万円を引き出した。

(近藤 2000a : 128)

このエピソードを（あくまであとから振り返れば、だが）多少のおかしみとともに回顧するだけでは、われわれは重要な論点を取り逃がしてしまうだろう。注目すべきは、この当時、ダ

ルク（近藤）は、薬物依存者を「承認」するための“場”を確保・維持するための基本財すら欠く状況であった、という点である。しかも——これも良く知られていることだが——草創期のダルクは、公権力の介入を忌避したために公的資金の受け入れに消極的であった（近藤・重田 2008）。地域やメリノール宣教会といったプライベート・セクターからの寄付によって、何とか施設を維持することが可能になったが、そうした状況は、いやがおうに近藤をはじめとする創立関係者たちに、薬物依存者の生活を下支えするための「保障」の重要性を認識させることとなった。

当時、入寮費は月十万円だった。生活保護（月十三～十四万円）が受けられる入寮者からは、支給されたお金の一部をダルクに払ってもらった。しかし、入寮者の中には生活保護を支給されない者もいた。それでもダルクに入寮したいと訪ねてくれば、私は一度も断らなかった。まったく収入の見込みのない薬物依存者でも受け入れた。たしかに、運営面からいうとたいへんである。

（近藤 2000a：141）

ダルクを設立するにあたって、近藤たちが直面した課題は、同時にダルクが乗り越えるべき問題意識を表すものでもあった。ダルクは薬物依存者が「承認」されつつ「回復」への途を歩むことのできる安全な空間でなければならない。メンバー全員が日々の生活を送りながら「ミーティング」に出続けることができないといけないのだ。しかし、それが現実化するためには、少なくともそうした空間やそこでの生活の維持を下支えする基本的なセキュリティとしての「保障」が調達されていなければならない。当時の薬物依存者は、「承認」だけでなく「保障」からも疎外された位置づけにあった。草創期ダルクは、そうした課題に自覚的に立ち向かい、「承認」と「保障」両者の欠如を埋め合わせるものとして存在していく、との問題意識を有していたのである。

4. 2. 4. 「保障」に向けた「支援」観

そうだとすれば、草創期ダルクには、「承認」に向けた「支援」だけでなく、「保障」に向けた「支援」に関連した意味づけも存在したと考えられる。上で見たように、ダルクはメンバーの共同「生活」を基盤に「ミーティング」をはじめとするプログラムを提供する施設である以上、衣食住レベルの生活を可能にする経済的「保障」が極めて重要となる。重ねて、メンバー自身やその家族が支払う入寮費が納入できない場合でも、草創期ダルクが希望者の入寮を拒むことがなかったことは、近藤にとっての「誇り」であった¹⁴⁾。生活保護や寄付金を活用して、何とかメンバーの生活を「保障」しなければならない、という意識と、それに基づく実践を志向していたのである。

しかし、草創期ダルクが重視し、実践していたのはこうした意味での経済的「保障」にとどまらなかった。

入寮者の起床は毎朝十時。起きた入寮者一人ひとりに昼食券と夕食の費用、夜のミーティングに行くための交通費、それにタバコ代など、一定のお金（約1300円）を渡す。入寮者は歩いて300メートル離れたデイケアセンターに行き、朝のミーティングを行う。一時間のミーティングが終わると、500メートル離れたマックの食堂で昼食をとる。そして、午後一時半から三時まで、再びデイケアセンターでミーティングを行う。その後は自由時間で自分の好きなことをやって過ごす。夜七時からのNAミーティング（会場は毎日違う）に出席するため、夕方六時にはみな一緒にデイケアセンターを出る。それが入寮者の一日の生活となった。

（近藤 2000a：153）

近藤は草創期ダルクの一日を上のように記述しているが、この「ミーティング」中心の規則的な暮らしの中で見過ごされがちなのは、そこにメンバーたちの“生活”が存在している、という至極当然の事実である。メンバーの“生活”を「保障」というのはどういうことだろうか。それは、経済的「保障」を超えて、あらゆるレベルで生起する「面倒」をみる／引き受ける、ということである。

はじめは、みんなのためにコップを洗っていました。20人もいるのに、だれ一人洗えない。みんな飲みっぱなし。怒りが出てくる。トイレも悲惨でした。流せないし、便器の中に用が足せない。そういう人がいっぱいいる。……そういう草創期でした。

（外山 1999：19）

両親が訪ねてきて、「息子が精神病院に入院して一年になります。これ以上病院にいても意味がないので、何とか引き取ってもらえないだろうか」と頼んできた。そこで、入院中の三多摩の病院に車で迎えに行った。

（近藤 2000a：133）

あのシャブの売人のマサキがスーパーマーケットで働き始めた。時給700円だという。「まさか、あのヤクザが働くとは考えられない。本当に働いているのだろうか」と思った。信じられなかった。ダルクが発足してから六カ月目。新年を迎えた寒い日の午後だった。私はマサキが働いているというスーパーにこっそり出かけた。……ある日は大根の投げ売り、ある日はミカンの箱売り…。マサキはまじめに働いていた。……失った左手の小指を隠しながら、一生懸命に大根を売っていた。……電柱に隠れてマサキの働いている姿を見ているうちに、私の体の中に生暖かいものがグッと込み上げてきた。気がつくと、涙とも鼻水ともつかないもので、私の顔と口髭はベトベトになっていた。

（近藤 2000a：145）

Kくんの場合、入寮した当日は足がフラフラして酔ったような状態だった。手もブルブ

ル震えて、母親の名前も書けないほどなのだが、これは覚せい剤を断つために処方されたクスリによる症状であった。……私はKくんに言った。「クスリでボーッとしたままの人生を送っても意味はない。いい人生にはならないよ。クスリをやめることに賭けてみるよ、命がけで」Kくんは軽く頷いて、クスリを切る覚悟を固めたようだ。「本人は命がけでクスリをやめると言っているから、クスリは切らした方がいい。さあ、闘いだ！ 苦しめ、もっと苦しめ…」私流の言い方でKくんを励ました。スタッフは彼のそばに付きっきりで徹夜で励まし、見守り続けた。翌朝までKくんは一睡もできず、真赤な目をしながらブルブルと震えていた。歩こうとしても一歩も歩けない。精神病院のクスリの禁断症状は言語を絶するほど苦しい。しかし、禁断症状を乗り越えなければ薬物依存からの回復はない。

(近藤 2000a : 195)

ダルクで“生活”するメンバーを「支援」するとはいかなることか、それは、上のようなものはや「ケースワーク」と呼ぶしかないような全面的なケアを引き受け、彼らの暮らし全体を「保障」する、ということに他ならない。スタッフは、洗い物、トイレ掃除から入退院の送迎、社会復帰の見守り、禁断症状の管理に至るまで、メンバー一人ひとりのニーズに即した多様な「支援」を提供する。外山（1999）は、草創期ダルクでの「支援」を振り返って「周りの雑事に追いかけて、入寮者のケアとかサービスはほとんどできない」（外山 1999 : 18）と述べているが、そこで言われる「雑事」こそが、メンバーの「保障」に向けたかけがえのないケアであり、草創期ダルクが志向したオリジナルな「支援」でもあったのではないだろうか。

5. ダルク“その後”の問題

ここまでの分析において、草創期ダルクにおいて、「依存」の「回復」とその「支援」に向けた実践が、「ミーティング」と施設生活を越えた「ケースワーク」を中心とした、メンバーの「承認」と「保障」を目指したものであったことを明らかにしてきた。本論文の最後に、草創期ダルクが意識していたもう一つの「回復」と、それを「支援」することの限界認識の存在を指摘しながら、ダルクとメンバーの「承認」と「保障」との関係をやや異なる角度から考察してみたい。

言うまでもないことだが、ダルクには、そこを“卒業”（退寮、退所）していく者“が”いる。“が”と書いたのは、“卒業”しない者も数多く存在するからだ。ダルクでは、メンバーとしての入寮を終えた後、スタッフとしての研修を受け、ダルク外部の社会に出ることなくスタッフとして働き続ける者が数多く存在する。また、“卒業”する者といっても多様である。ダルクのプログラムを終えて文字通り“卒業”する者もいれば、途中でプログラムを脱落して退寮となったり、知らず知らずのうちにひっそりとダルクから離れていく者もいる。こうしたダルクの（“中退者”も含めた）“卒業生”たちはどこに行くのだろうか。ダルクは草創期からこの問題と対峙し続けてきた。

「回復途上の依存者が施設を“卒業”したあとに何が起こるのでしょうか？」本当の「トリー

トメント」は、彼／女たちが施設を去った後にはじまるのです。再使用しないようにサポートするアフターケア・プログラムが薬物リハビリ施設とは別に存在しなければなりません。彼／女たちには、はじめて薬物の支えなしに人生に直面することをサポートするグループが必要なのです。そうしたアフターケア・サポートグループとしてわれわれが知っている日本で唯一のものは、NAです。現在NAミーティングは東京、横浜、名古屋、大阪、そして四国で開かれていますが、NA（もしくはNAが存在しない地域ではAA）がなかったら、ダルクの回復プログラム（recovery program）はほとんど意味をなさないでしょう……ダルクの務めとは、クライアントにNAへの参加と、薬物をやめ“たい”という気持ちを動機づけるよう試みることなのです。

（Assenheimer 1991 = 1991→1997：18、訳は一部変更した）

上記ロイ神父の言明からも明らかなように、草創期ダルクは（“卒業”後という意味での）“その後”の問題を明確に意識したうえで、それに対して「NA（に代表される自助グループ）へつながり続ける」という「回復」ビジョンを提示していたと考えられる。

ところで、NAは、通常は夜間に開かれる「ミーティング」のみを提供するセルフヘルプ・グループである¹⁵⁾。NAメンバーは普段は（ダルク入寮／通所中の者は除いて）社会内で各自の生活を営みながら、夜になるとミーティング会場へと集い、ミーティングが終われば再び自分たちの生活の場に戻るのである。NAとダルクは、薬物依存者に対する「支援」のスタイルは全く同じでも、そのかわり方の性質が大きく異なっている。

実は、このNAとダルクの相違が、ダルクの“卒業”をめぐる重要な困難性をもたらすことが、草創期ダルクにおいては明確に理解されていた。

今のダルクやマックの入寮者や通所者の一番の問題は、就労するときと部屋を借りるときではないでしょうか。部屋を借りるときは、私たちが保証人にならなければならない。他に、誰も彼らの保証人になる人などいないのですから。……それから仕事探し。こういう不景気になってくると、仕事探しはとても大変です。薬物依存症だと特別に言う必要はないと思いますが、ミーティングに出るためには残業のあまりない仕事でなければなりません。でも、そんな会社はなかなかありません。最近の就職先はほとんどが焼肉屋、パチンコ屋、新聞配達です。そうするとその賃金で、各エリアのサービスの活動をしたり、ラウンドアップに行ったり、あるいは自分のグループに通って、しかもプログラムをこなしていかなければならない。家賃など安くはないですから、とても大変な苦勞がいると思います。

（近藤 1999：30）

NAとダルクの違い、それは端的にメンバーの「保障」に向けた「支援」の有無をめぐる違いである。ダルク“卒業”後は、NAにつながりながらも社会内で生活をしていかなければならない。その時に直面する困難性（特に上で近藤が指摘する職住をめぐる問題）に対して、ダ

ルグが継続して「支援」を行うことは極めて難しい。しかも、こうした社会内での生活が成り立ってこそ、NAにつながり続ける「回復」が可能になるのだから、ここでの困難性はロイ神父的な“その後”の「回復」ビジョンを掘り崩す危険性をはらむものでもある。

さらに、“その後”の問題は、「承認」をめぐる困難性とも関係する。確かに、NAにおける「回復」もダルクと同様、平等なメンバーシップをもとに、（自らを「依存」であると認めていない者や再使用に至ってしまった者すらも）来る者拒まず「承認」するような志向性を有している。その意味で、NAもダルクと同様、メンバーにとっての「安全な居場所」であり、「承認」の共同体である、ということができよう。しかし、重ねて、NAはダルクと異なり、施設ではないのだ。NAを一步出れば、そこには社会の「荒波」（近藤 1999:31）が待ち受けている。「私はここにいる人たちの味方です。地域の味方であってはなりません。だから、何かあったときには、僕は地域と対等にやりますが、地域よりも大切にしなければならないのはこの人たちを守っていくことです」（近藤・重田 2008:193-194）と近藤が言うとき、それはすなわち、「承認」に向けた「支援」が、ダルクやNAの外部では調達困難であるという事実を示唆するものでもあるだろう。

草創期ダルクは、ダルクの“卒業”という事態を意識しつつ、“その後”の問題に対してNAでの「回復」というビジョンを提示した。しかしそれと同時に、ダルクはそこにある困難性を看過していたわけではなかったと思われる。“その後”において、メンバーが「保障」と「承認」を欠く状態に陥る危険性、そしてそこにおいてダルク自身が「回復」のための「支援」主体となることの限界が、明確に認識されていたのである。

5. 考察と結語——継続的な「承認」と「保障」に向けて——

本論文では、「東京ダルク」として1985年にスタートしたダルクの草創期に注目し、薬物依存からの「回復」とそのための「支援」のあり方がどのような意味づけのもとで理解されていたのかについて、ダルク創設者である近藤恒夫の言説をはじめとする関係者の諸言説をもとに分析を行った。ダルクは、薬物依存者が安全な環境で「回復」をめざすことのできる「承認」の空間として構想されたが、そこでの「回復」とは、医師等の専門家の監督の下で病気を治し、原状へと復帰する、という意味での回復ではなく、ときに再使用を繰り返す中で自ら「依存」であることを認める自由を行使し、他の「依存」者との平等な関係性に基づく共同生活を通して、「依存」という病気と付き合い続ける＝薬をやめ続けるような「回復」であったといえる。そうした「回復」を手助けするためのダルクの「支援」は、“他者とは異なる自立した自己”と“個を超えたつながりの共通基盤”の双方をメンバーに与えていくような、「承認」供給の場としての「ミーティング」を中心に組織されていたが、他方で、そうした「承認」を下支えする多様な「保障」の不足とその必要性も強く認識されていた。しかし、社会においては容認されがたい薬物依存者の「承認」と「保障」を提供しようとするダルクの「支援」観は同時に、メンバーがダルクを“卒業”した後の「回復」——NAに参加しながらの社会での「回復」——の困難性認識と表裏のものでもあったといえる。NAは自助グループである以上「保障」機能を持ちえず、グループに参加する時間以外の社会生活においては「承認」からも疎外される可能性が

極めて高い。草創期ダルクにおいて模索された「依存」からの「回復」を可能とするための「承認」と「保障」という二つの「支援」は、両者を調達することの（特にダルク“卒業”後の）困難性を明確に認識した上での実践的投企、という側面を色濃く有していただのである。

本論文冒頭で述べたように、現在、ダルクは全国各地に開設され、草創期とは異なる状況の中で多様な問題関心に基づく幅広い活動を展開している。その意味で、現在において（各）ダルクや支援者たちのあいだで議論されることの多いダルクの“アイデンティティ”をめぐる諸問題は、草創期のものとはその論点を大きく異にしているだろう。本論文は、あくまで草創期ダルクに限定してその「回復」・「支援」観の一端を明らかにしたものに過ぎず、その知見を時間的／空間的に一般化すべきではない。しかしながら同時に、本論文で指摘した「承認」と「保障」の重要性、そして“その後”の困難性は、現在でもほぼ手付かずのまま残されたダルク共通の課題であることもまた、事実であるように思われる。本論文の最後に、草創期のダルクが未完のプロジェクトとして掲げた「その後」の『承認』と『保障』というこの課題について、やや抽象的なレベルから敷衍的考察を行っておくことにしたい。

まず、「保障」から考えてみよう。ダルクの“その後”において薬物依存者たちの前に立ちあはだかる「保障」上の壁は、先に近藤が述べていたような職住レベルの困窮にはじまり、健康管理や生活相談といった生活ニーズに至るまで、広範囲に渡することは想像に難くない。こうした個別ニーズを細かく掘り取り、“その後”においてもNAに参加しつつ「依存」からの「回復」に取り組み続けることができるような、継続的な生活保障を行っていくことが何よりも大切なことである。そのためには、マクロなレベルでは①薬物依存者個人と②ダルクの両者に対する経済的保障が、ミクロなレベルでは③個々人のニーズに即した多様な支援オプションの制度化が不可欠だろう。第一節でも触れた全国ダルク調査からは、ダルク退所後のニーズとして、経済的保障が第一に挙げられていることから、ダルク“卒業”者に対する最低限の所得保障は手控えられてはならない（①の必要性）。しかし同時に、同調査を見ても“卒業”者が抱えるニーズは経済的保障に留まらないのは明らかであり、住居確保、職業支援、相談支援等の多様な社会的支援が現実利用可能な選択肢として用意されている必要がある（③の必要性）。その際、長年の経験の中で「ケースワーク」的な実践を蓄積してきたダルクが果たす役割は、ダルク“卒業”者にとっても（少なくとも当面のあいだは）大きいと考えられる。だとすれば、同様の保障はダルクやそのスタッフに対しても提供されなければならないはずだ（②の必要性）。

“その後”の「承認」は、「保障」以上に困難な課題である。草創期ダルクにおいて薬物依存者は、ただ生きていく中で「回復」へと取り組むだけでなく、その生を「承認」されたうえで「回復」に取り組むことが求められていた。そのためには、NA（ダルク）外部の社会にも「承認」の空間を拡大していく必要があるだろう。しかしながら、すぐに想像がつくように、これは決して容易なことではない。「依存症からの回復者が、わざわざ社会の汚穢に無理に自分を合わせていく必要があるのか疑問だ。一日一日を焦らず、ボチボチと、『まあ今日のところはこんなもの』『今日をとりあえず生きて過ごせばいいさ』といったような、人の目を気にしない自由さで生きていければ、それこそが回復を証明していることに他ならないと思う」（近藤2000a：46）という近藤の言葉は至言だが、「汚穢」にまみれている社会は、こうした薬物依存

者たちの多様な生＝「回復」を認めようとはしないだろう。現代日本において薬物使用は——「犯罪」として認定されるときに典型的だが——道徳的な観点からスティグマ化され断罪されることが通例である。もちろん、そうした保守層の厳罰的視線に抗して薬物依存者の「立ち直り」を支持する進歩派陣営も少数ながら存在する。しかし、その多くは「薬物を決して使用しない生」「就労する生」「コミュニティに参加する生」「迷惑をかけた社会に恩返しをする生」¹⁶⁾といった特定の(規範的)ライフスタイルを選択した場合に限って依存者たちの「回復」を「承認」するものであり、上記の近藤が述べる「回復」とは異なる“条件付きの「承認」”でしかない。社会全体を「承認」の共同体へと変革していく努力は絶えず継続されるべきだが、左派右派を問わず現代日本においてそうした方向性は支持されているとはいえない。

だとすれば、“その後”の「承認」と「保障」を構想するにあたっては、——重ねて、厳罰的視線や進歩派陣営を批判し、社会全体を「承認」の共同体へと変革していく方途を模索する努力は継続しつつ——NAに安心してつながり続ける中で仲間との相互作用を通じた「回復」を実践し続けることができるような、(経済的／非経済的)「保障」の確保がまずもって火急の課題として浮上するようになる。そして、その「保障」は、上で述べた「承認」のケースと同様、特定のライフスタイルとの交換条件として提供されるものであってはならない。ワークフェアをはじめとする福祉受給と特定の生（ワークフェアの場合は「就労する生」や「就労をめざして教育訓練を受講する生」）をトレードオフの関係におくような「保障」は、それ自体が薬物依存者たちの「承認」を掘り崩してしまう危険性をはらんでいる。「承認」を掘り崩すのではなく、「承認」を下支えする無条件¹⁷⁾の「保障」が支持されるべきだろう。

こうした多様な生の「承認」と「保障」に支えられた薬物依存からの「回復」は、むしろ当事者たちの依存を助長する過度な自由の尊重であり、過去に薬物を使用したという責任逃れを認める甘やかしだ、という意見があるかもしれない。おそらくそうした意見は多分に特定の価値観（前述の保守層の厳罰的視線）に基づくものであるが、そもそもいくつかの前提において問題があるように思われる。第一に、ここでの多様な生の「承認」と「保障」はなにも薬物依存者のみに特権的に認められるべきものではなく、全ての人間に対して平等かつ潤沢に提供されるべきものである。だとすれば、それは“過度”のものでも“甘やかし”でもない、といえるだろう。そのように見るとしたら、それは現代における「承認」と「保障」の全体的水準が“過少”であり“劣悪すぎ”るからであり、薬物依存者の「承認」と「保障」を切り捨てるというやり方ではなく、(薬物依存者を含む)全ての人間に対する「承認」と「保障」をより分厚くするというやり方で対応されるべきである。第二に、自由の尊重は責任の放棄を認めるものでも促進するものでもなく、むしろ人間としての責任を行使するための基礎条件である。多くの薬物依存者たちは過去においてさまざまなかたちで刑事責任を果たしている¹⁸⁾。それに加えてさらなる責任を問い続けようとするのであれば、社会内での自由をできる限り認めなければならない。

われわれが責任を行使するために享受する本質的な自由は、個人的、社会的、そして環境的な状況にきわめて大きく左右される。……生まれたときにすでに半奴隷状態にある農

奴、抑圧的な社会によって窒息しそうな服従状態にある少女、所得を得るしっかりした手段を持たない土地のない不運な労働者はいずれも、福利の観点から言って恵まれないだけでない。責任ある人生を送る能力の点でも恵まれないのである。そのような能力は特定の種類の基本的自由を保有していることにかかっている。責任は自由を要求する。したがって、人々の自由を拡大するための社会的支援を主張することは、個人の責任の擁護であって、それに反対することではない。

(Sen 1999=2000: 327、強調部分は原文による)

アマルティア・センが上で述べているように、「責任は自由を要求する」のであって、「自由は責任を要求する」のではない。近藤が、「ダルクではクスリを使う自由もあるけれど、使わない自由もある。使う中で使わない自由を見つけていけばいいんだよ」(近藤 1997: 109)と述べると同時に、「ダルクでは「クスリをやるのも、やめるのも」本人の責任であることをまず伝えるようにしている」(近藤 2009a: 6)とも語るとき、その言葉はセンと同様の意味で理解される必要があろう。「クスリを使う／使わない自由」は過度な自由の尊重ではなく、本人がその選択の責任を果たすための基礎条件なのである。

多様な生の「承認」と「保障」を擁護するのであれば、ある生の状態(結果)に対して「自己責任を負うべきだ」と叫ぶ前に、「責任を果たすための基礎条件は整っているか?(自由の保障が疎かになっていないのではないか?)」と絶えず吟味を怠らずにいる姿勢が強く要求される。責任を個人化するのではなく、自由を社会化すること、それは決して身勝手な要求でも、依存心の微表でもないはずだ。

草創期ダルクがめざし、さまざまなかたちで言説化した「回復」と「支援」のビジョンは、「承認」と「保障」という薬物依存者たちが生活していくうえでの基本的ニーズ充足に向けた課題を開くものであったと理解できる。本論文の議論、そして本節での考察が示唆するように、その課題のアクチュアリティは現在においてなお色あせていない。そして、その課題を(草創期ダルクとともに)引き受けるのであれば、われわれは薬物問題やその支援といったレベルを越えたよりマクロな規範的社会構想へと、その歩を進めていくことを余儀なくされるはずである。

註

- 1) AAは、アメリカ合衆国において、キリスト教的な断酒運動や酒害対策を背景に、ビルとボブという二人のアルコール依存者によって1935年に形成されたとされる。二人は幾度も断酒に失敗していたが、二人で飲酒や断酒について率直に話し合うことを通して、相互に断酒させあうことに成功する、という不思議な体験をした(葛西 2007)。こうしたことから、ミーティングと共助を重視するセルフヘルプ・グループとしてのAAの性格がうかがえる。AAはまた、断酒のためのプログラムとして「12ステップ」を重視していることでも知られる。「12ステップ」は、下に掲げるように断酒に向けたスモール・ステップとして12段階の状態像を規定したもののだが、葛西(2007)も述べるように、順序よく展開するわけでも、この文面を読んだだけで即時的にステップをたどることができるような標準化されたプログラムでもない。その意味で、「文書と合わせて仲間の経験を受け入れていくこと」(葛西 2007:

91)を必要とするような、「回復」の文化の中に埋め込まれたシンボルでもあるといえる。

〈AAの12ステップ〉

1. われわれはアルコールに対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた。
 2. われわれは自分より偉大な力が、われわれを正気に戻してくれると信じるようになった。
 3. われわれの意志と生命の方向を変え、自分で理解している神、ハイヤーパワーの配慮にゆだねる決心をした。
 4. 探し求め、恐れることなく、生きてきたことの棚卸表を作った。
 5. 神に対し、自分自身に対し、もう一人の人間に対し、自分の誤りの正確な本質を認めた。
 6. これらの性格上の欠点をすべて取り除くことを、神にゆだねる心の準備が完全にできた。
 7. 自分の短所を変えて下さい、と謙虚に神に求めた。
 8. われわれが傷つけたすべての人の表を作り、そのすべての人たちに埋め合わせをする気持ちになった。
 9. その人たち、または他の人びとを傷つけないかぎり、機会あるたびに直接埋め合わせをした。
 10. 自分の生き方の棚卸を実行し続け、誤ったときは直ちに認めた。
 11. 自分で理解している神との意識的触れ合いを深めるために、神の意志を知り、それだけを行っていく力を、祈りと黙想によって求めた。
 12. これらのステップを経た結果、霊的に目覚め、この話をアルコールに伝え、また自分のあらゆることに、この原理を実践するように努力した。
- 2) 前註でも述べたように、「12ステップ」をはじめとするAA、NA、そしてダルクのプログラムには、「フェローシップ」と呼びならわされる「仲間」同士の関わりが極めて重要な要素としてかかわっている。「仲間」の存在がダルクにおける「回復」に果たす役割の詳細については、伊藤（2012）を参照。
- 3) ダルクにおいては、「回復」途上における薬物再使用に対して、「スリップ」もしくは「リラプス」と呼びならわしながら、極めて興味深い対応を行っている。「スリップ」と「リラプス」の違いに関しては相良（2012）、「スリップ」に対するダルクの対応については相良（2012）、南（2012）を参照。
- 4) 調査の概要は、幸田ほか（2009）を参照。
- 5) こうした問題は、現場のスタッフからもすでに報告されている（加藤 2010）。
- 6) メンバーの半数以上が調査時点で在籍しているダルクにたどり着く以前に、二か所以上の他のダルクに在籍した経験がもつ。
- 7) この数は類似の先行調査に照らしても増加しつつあることが推測される（宮永 2008）。
- 8) ダルク創設者の近藤恒夫は、「全国にあるダルクは、東京の日本ダルク本部と連携は取っているが、それぞれが独立したダルクで、本部から指示や命令などをするとは一切ない」、「やりたいというスタッフがいれば、勝手に分裂して増えていける」（近藤 2009b：204-205）と述べている。
- 9) 東京ダルク設立時（1985）は、日本にダルクはひとつしか存在していなかった。その意味で当時は、ダルク＝東京ダルクという等式が成り立つ（現代とは大きく異なる）時代であったといえる。二つの目のダルクである名古屋ダルクが設立されたのはその約三年半後、1989年のことであり、全国各地のダルク設立が加速化したのは2000年代に入ってからのことである。本論文では1980年代から90年代初頭～半ばにかけての東京ダルクを「草創期」ダルクと呼ぶことにする。
- 10) 治療共同体モデルは、例えば群馬ダルクなどその他のダルクでも試行的に導入されつつある。
- 11) メリノール・アルコール・センターの略。アルコール依存者のための、AAの12ステップに基づくリハビリテーション施設。1978年、メリノール宣教会のジャン・ミーニー神父によって東京三ノ輪にはじめて設立されて以来、1986年当時で全国15箇所を数えるまでになっていた。ダルクはマックを参考

に作られた施設であり、その意味ではマックはダルクのアルコール版と考えることもできる。

- 12) 「薬物依存症は病気であり、非行・犯罪ではないのです（世界保健機構でも、アルコールを含めた薬物依存は病気であると定義しています）。「だらしない」、「意志が弱い」と、薬物を使用している若者から目をそむけないでください」（近藤 1991→1997：5）
- 13) （軍司貞明の緻密な取材に基づく、近藤と茨城DARC創設者岩井喜代仁との会話）「オレもオマエも覚せい剤でさんざん苦しんできたよな。いい思いもしたけど、地獄も味わったな。クスリやめようとしてもどうしてもやめられなかった。なぜなのか考えたことがあるか」「あるよ。意志が弱くてダメな人間だからって」「違うんだな。そこが。病気なんだよ。オマエもオレも」「？……」「薬物依存は病気なんだ。病気だからシャブが欲しくなるんだ」「今までそんなこと聞いたことない」「アルコール依存症と薬物依存症を研究している精神科の医者グループがあるんだ。俺はその人たちからそう学んだよ……」「わしは病気だったのか。近藤さんも…」「そうだ」「そう思っているのか？」（軍司 2001：283-284）
- 14) 「私の唯一の自慢、誇りは、ダルクを必要とする人、ダルクのドアを叩き、入寮を希望した人は、すべて受け入れてきたことだ」（近藤 2000a:168）と語られる通り、草創期においては実に徹底した「保障」が提供されていたと思われる。たとえば、近藤は一人のアルコール依存の路上生活者の思い出を回顧している。「ある日、ナイトケアセンターにボロボロの衣服をまとった浮浪者が訪ねてきた。年齢は五十代。長く風呂に入っていないらしく、異臭が漂ってくる。鼻にツーンときて、思わず鼻をつまんだほどだ。しかし、ここで追い出したらダルクのモットーに反する。一応、話を聞くことにした。「施設から脱走してきて、今日寝るところがない。酒浸りの日々だったが、酒はもうやめたい。泊めてほしい」路上生活を続けてきたウッチーは、そう懇願する。私はダルクのモットー通り、ナイトケアセンターに泊めてやった。居心地がいいのか、その後、ウッチーはダルクの住人になってしまった」（近藤 2000a：154）。ここで繰り返されるダルクの「モットー」とは、ただ「入所を拒まない」ということを超えて、掛け値なしに生活の「保障」にまで踏み込んだものである。
- 15) NAとダルクは、入寮中から密接な関係にある。先に近藤の発言からもうかがえるように、一日三回のミーティングのうち、夜のミーティングはNAのミーティングに参加する。NAメンバーであってダルクメンバーでない者はいても、その逆は想像しにくい。
- 16) 近年、犯罪学の領域で注目されている長所基盤モデルないしリカバリー・パラダイム（日本犯罪学会 2011）と呼ばれる犯罪・非行からの「立ち直り」に関する説明理論は、こうした進歩的見解を代表するもののひとつである。「リカバリー・パラダイムにおいては、犯罪歴は、それを乗り越えた／生きのびた体験として語りなおしうる、立ち直りの資源（ストレングス）の徴表として、例えば、依存症者の自助グループにおける「底つき体験」のように、本人の当事者性の真正さを確認する要素である」（津富 2011：4）とされるように、この理論は当事者の経験や語りを重視している点で、本論文で論じてきたダルクの「回復」「支援」観と共振する面を多く持つ。しかしながら同時にこの理論は、「立ち直り」のあり方に関して、「社会に恩返しをしたいという気持ちを持つ」（Maruna 2001）、「本人が満足感を得られ、社会にとっても生産的な人生（善き生：good lives）を送る」（Ward 2011=2011）といった条件を設けている点でダルクの実践とは決定的に異なる点に注意が必要である。長所基盤モデルないしリカバリー・パラダイムは、経験的な研究から導かれた「立ち直り」の最大公約数的モデルであり、その意味では現実には「社会に恩返し」する生や「社会にとって生産的」な生を生きることによって自己実現が図れる（すなわち「承認」される）薬物依存者は少なくないと想像できる。しかし、この理論を、「そのような『立ち直り』がありうる」というだけでなく「犯罪者処遇の新たなパラダイム」（津富 2011：4）といった処遇に際しての規範的指針として用いようとするのであれば、それはある特定のライフスタイルを「承認」の条件として設定することに他ならない。近藤は、草創期の講演におい

て次のように述べている。『誰かのために』やるというのは続かないですよ。やっぱり自分自身のためにセルフヘルプ・グループがある。自分が必要だ。自分のためにやるんだというのが基本に流れてないと長続きしないですね。そうでないと次から次につぶれていきます。……他人のために何かしてあげようという程度では、持続していくプログラムにはならないと思います」（近藤 1989→1992：81）。もちろん、ダルクにおける薬物依存当事者たちの「回復」への取り組みは、間違いなく他者（特に、後を追う他の依存当事者たち）に向けた貴重なメッセージとして「役に立って」いる。しかしそれは本人が「他者や社会の役に立ちたい」という「目的」を志向したのではなく、その真逆、つまり自分の「回復」を第一に考えた行動の「結果」であって、それ以上のものではない（むしろ、この「自分のため」が結果として「他者のため」にもなるという点こそが、セルフヘルプ・グループの真骨頂といえよう）。上の近藤の言明を引き受ければ、草創期ダルクにおいて、「善き生」や「社会の役に立つ生」といった特定のライフスタイルを規範化（「目的」化）することは愚かしい錯誤であるばかりか、「回復」を阻害する認識であるとすら理解されていたのである。慎重を期して再度繰り返そう。草創期ダルクにおいても、「善き生」や「社会の役に立つ生」を志向するライフスタイルこそが自分にとっての生き甲斐（＝「承認」）であると考えた者たちは存在しただろうし、それが否定されていたとは考えられない。そうではなく、注意深く退けられたのは、そうしたライフスタイルを「回復」の（望ましい）モデルとして規範化することであった。「人の目を気にしない自由」は、社会にとって生産的だったり、社会への恩返しを志向するような「善き生」などに収まらない、はるかに多様なライフスタイルを許容するものである。

- 17) もちろん、ここでいう「無条件」性は、文字通りの意味で受け取られてはならない。あくまで近藤のいう「人の目を気にしない自由」を掘り崩さないための「無条件」性であり、たとえば積極的に他者や自己に危害を加えるライフスタイルに関しては「保障」の外部に置かれる。とはいえ、「積極的に他者や自己に危害を加えるライフスタイル」の範囲決定に関しては対話に開かれているべきであるし、外部化に際しては、以下の二点に留意した上で慎重になされる必要がある。第一に、「積極的に他者や自己に危害を加えるライフスタイル」が、そもそも「承認」や「保障」の欠如・不足を背景として選び取られたものなのではないか、という反省的吟味を絶えず行うこと（その場合、なすべきは「保障」からの外部化ではなく、「保障」の提供である）。第二に、「積極的に他者や自己に危害を加えるライフスタイル」を取り下げた者に対しては、速やかに「保障」の提供を再開すること。
- 18) 冒頭の全国ダルク調査に言及した際に触れたように、ダルクメンバーのうち72%の者に、過去において薬物理由の逮捕経験がある。

文献

APARI編, 2000, 『born again』 APARI.

Assenheimer, R., 1991, "The Essentials of a Drug Rehab Institution". (=1991→1997, 吉岡隆訳「リハビリ施設の四つの条件」ダルク編集委員会編『なぜ、わたしたちはダルクにいるのか』東京ダルク, 16-24.)

綾屋紗月・熊谷晋一郎, 2010, 『つながりの作法』NHK出版.

Conrad, P. & J. W. Schneider, 1980, "Looking at Levels of Medicalization: A Comment on Strong's Critique of the Thesis of Medical Imperialism," *Social Science and Medicine*, 14: 75-79.

Frank, A. W., 1995, *The Wounded Storyteller*, Chicago: The University of Chicago Press. (=鈴木智之訳, 2002, 『傷ついた物語の語り手—身体・病い・倫理』ゆみる出版.)

軍司貞則, 2001, 『麻薬脱出』小学館.

平井秀幸, 2004, 「『医療化』論再考」『現代社会理論研究』14: 252-264.

平井秀幸, 2008, 「(私にとっての)薬物使用の社会学——『社会(的なもの)とは何か』と／から、『い

- かなる社会（的なもの）なのか』へ——」2008年度日本犯罪社会学会大会報告原稿。
- 平井秀幸, 2007, 『薬物使用に対する『介入／処遇』のあり方をめぐる社会学的研究——ポスト福祉国家期における「ネットワーク／連携」の上昇に注目して——』東京大学大学院教育学研究科2007年度博士論文。
- 平井秀幸, 2010, 「矯正教育の社会学——近年の「教育化」をどう捉えるのか? ——」2009年度日本大学教育学会春季学術研究発表会報告原稿。
- 平井慎二, 2011, 「嗜癖行動のメカニズムに従った薬物需要削減のための連携」『犯罪と非行』169: 50-71.
- 市川岳仁, 2010, 「回復と支援の狭間で揺れる当事者——転換期の当事者カウンセラー——」『龍谷大学矯正・保護研究センター研究年報』7: 31-42.
- 市川岳仁, 2011, 「重複障害を持つ依存症回復者の地域移行に関する研究報告」NPO法人三重ダルク編『重複障害を持つ依存症回復者の地域移行に関する研究・報告』2010年度ファイザープログラム～心とかからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援, 3-10.
- 石塚伸一, 2003, 「薬物依存からの回復と市民的支援」石塚伸一編『現代「市民法」論と新しい市民運動』現代人文社, 167-185.
- 石塚伸一編著, 2007, 『日本版ドラッグ・コート——処罰から治療へ——』日本評論社.
- 石塚伸一, 2010, 「日本版ドラッグ・コート実現のための障碍とその克服」『龍谷大学矯正保護研究センター研究年報』7: 4-22.
- 伊藤秀樹, 2012, 「薬物依存における孤独と『仲間』」2012年度日本社会学会大会報告原稿.
- 上岡陽江・大嶋栄子, 2010, 『その後の不自由』医学書院.
- 葛西賢太, 2007, 『断酒がつくりだす共同性』世界思想社.
- 加藤武士, 2010, 「薬物依存者たちによる使わないで生きていくための実践」『龍谷大学矯正保護研究センター研究年報』7: 43-52.
- 近藤恒夫, 1989→1992, 「なぜセルフヘルプ・グループが必要なのか」東京都精神医学総合研究所・医療看護研究室編『講演集セルフヘルプ・グループ』東京都精神医学総合研究所, 69-96.
- 近藤恒夫, 1991→1997, 「ダルク誕生のいきさつ」ダルク編集委員会編『なぜ、わたしたちはダルクにいるのか』東京ダルク, 8-15.
- 近藤恒夫, 1997, 『薬物依存』大海社.
- 近藤恒夫, 1999, 「マック・ダルクの歩み／原点とは何か?」JCCA編『マック・ダルクの原点とは』JCCA, 23-31.
- 近藤恒夫, 2000a, 『薬物依存を越えて』海拓社.
- 近藤恒夫, 2000b, 「薬物依存の狂気」APARI編『born again』APARI, 12-24.
- 近藤恒夫, 2009a, 「まえがきにかえて」日本ダルク本部編『TURNING POINT』日本ダルク本部, 3-10.
- 近藤恒夫, 2009b, 『拘置所のタンボボ』双葉社.
- 近藤恒夫・重田園江, 2008, 「ダルクの流儀」『現代思想』26(13): 180-194.
- 幸田実ほか, 2009, 「ダルクの現状と課題: 平成19年度 薬物依存症回復支援施設全国調査、及び平成18年19年度ダルクプログラム修了者調査から」『日本アルコール・薬物医学会雑誌』44(4): 264-265.
- 小柳武・染田恵, 2005, 「日本における薬物乱用者処遇の現状と課題」『法務総合研究所研究部報告』27: 317-330.
- Maruna, S., 2001, *Making Good: How Ex-Convicts Reform and Rebuild Their Lives*, Washington, D.C.: American Psychological Association.
- 南保輔, 2012, 「スリップサイクルの進化を通じての『回復』」2012年度日本社会学会大会報告原稿.
- 宮永耕, 2008, 「薬物依存者に対する社会復帰資源に関する研究 (1)」和田清 (主任研究者)『薬物乱用・

- 依存等の実態把握と「回復」に向けての対応策に関する研究』平成19年度厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）分担研究報告書，151-159.
- 宮永耕，2010，「薬物依存者の回復における社会福祉援助の役割」『龍谷大学矯正保護研究センター研究年報』7：99-111.
- 永野潔，1991→1997，「治療共同体の歴史と薬物依存治療施設、DARCの役割」ダルク編集委員会編『なぜ、わたしたちはダルクにいるのか』東京ダルク，185-199.
- 日本犯罪社会学会編，2011，『犯罪者の立ち直りと犯罪者処遇のパラダイムシフト』現代人文社.
- 西村直之，2000，「民間薬物依存回復施設DARC（ダルク）について」APARI編『born again』APARI，155-170.
- 尾田真言，2010，「刑事司法制度への薬物依存症治療導入の試み」『龍谷大学矯正保護研究センター研究年報』7：112-122.
- 相良翔，2012，「「回復」の一契機としてのスリップ」2012年度日本社会学会大会報告原稿.
- Sen, A., 1999, *Development as Freedom*, Oxford: Oxford university Press. (=2000, 石塚雅彦訳, 『自由と経済開発』日本経済新聞社.)
- 嶋根卓哉，2006，「薬物依存症者による自助グループ“ダルク”について」『犯罪と非行』146：104-123.
- 嶋根卓哉，2007，「処遇をめぐる爽やかな風（1）～ダルク～」石塚伸一編『日本版ドラッグ・コート』日本評論社，168-186.
- 外山憲治，1999，「マック・ダルクの歩み／原点とは何か？」JCCA編『マック・ダルクの原点とは』JCCA，13-22.
- 津富宏，2011，「はじめに」日本犯罪社会学会編『犯罪者の立ち直りと犯罪者処遇のパラダイムシフト』現代人文社，3-7.
- Ward, T., 2012, "The Rehabilitation of Offenders: Risk Management and Seeking Good Lives," *Japanese Journal of Offenders Rehabilitation*, 1: 57-76. (=2012, 小長井賀典監訳, 「犯罪者の更生——再犯危険性の管理と善い人生の追求」『更生保護学研究』1：77-95.)
- 矢澤祐史，2010，「リカバリー・ダイナミクス・プログラム（Recovery Dynamics Program）——日本におけるアディクション治療の伝承——」『龍谷大学矯正・保護研究センター研究年報』7：53-62.

Toward a Community of “Recognition” and “Security” —“Support” and “Recovery” in the Early Period of DARC—

Hideyuki HIRAI

This paper conducts an analysis on how “recovery” and “support” of drug dependents are understood in the early period of DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center) which was first established in 1985 as “Tokyo DARC,” mainly based on the discourse of Tsuneo Kondo, a founder of DARC, and other documents written by those who were involved with the foundation.

DARC was established as a place of “recognition” where its members could engage in the process of their “recovery” in a secure environment. “Recovery” in this case is not so much restitution from drug dependence to a healthy condition under professional supervision by physicians as rehabilitation in which DARC members work to continue to quit using drugs through a communal life based on an equal relationship with other fellow members. Although they may repeat relapse in DARC, the relapse is understood positively as exercising their freedom by which they recognize that they were actually dependent on drugs. “Support” for the realization of “recovery” in the early DARC put great importance on “recognition” and was focused on “meetings” where DARC members could acquire both an “independent self” and “shared ground beyond personal experience.” The early DARC, however, did not understand its shortcomings and necessity of “security” which enabled the members to obtain “recognition.” Usually, it is very difficult for ordinary society members to admit that drug dependents desperately need “recognition” and “security,” so it is also very difficult for them to begin on a path to “recovery” in society by participating in NA (Narcotics Anonymous) after “graduation” from DARC. NA does not have any function to provide “security,” and it is quite possible for NA members to be easily alienated from “recognition” in their everyday life outside NA as well.

The early DARC sought to provide “recognition” and “security” as important ways of “support” for “recovery” in DARC. At the same time, it deeply realized both difficulty and necessity to continue providing the “support” to DARC members and its graduates.

Keywords: DARC (Drug Addiction Rehabilitation Center), Recovery, Support